

フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響： 継続的インタビュー及び参与観察を手掛かりに

渡 辺 幸 倫

羽井佐 昭 彦

概要

This paper reports the preliminary findings of the 2014 academic year portion of a two-year study titled “The influence of studying English in the Philippines on Japanese learners’ language attitude: Analysis through longitudinal survey and participatory fieldwork” funded by Sagami Women’s University Special Research Grant Category B (2013-2014). The purpose of this longitudinal research is to examine the influence of study abroad experiences to the Philippines on the language attitude of Japanese students in the view to gaining suggestions for a new English learning framework within the Japanese context.

1. はじめに

本稿は、相模女子大学特定研究助成費(B) (『フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継続的インタビュー及び参与観察を手掛かりに』平成25年度から26年度)の助成を受けて実施している研究のうち初年度の中間報告書執筆以降の状況をまとめたものである。今後、助成期間中に得られた情報を精査して、論文等の形で発表する予定だが、現段階のまとめとして整理したい¹。

本研究の背景には、国内外の英語教育研究が World Englishes (世界で使われている様々な英語) に対する認識の広がりを反映させながらも、依然として留学経験による学習効果についての研究が、英語を母語として使用するインナーサークル(英米豪加など)での事例に偏っているという反省がある。しかし現実には近年、英語を第二言語として使うアウトサークル(フィリピン、シンガポールなど)への留学が急増している。インナーサークルとは異なる環境への英語留学に関する学術的研究は、特にアジアの文脈において日本に先んじてフィリピンへの留学者が急増した韓国人を対象としたものが散見される程度で、より一層の研究が求められている。

近年の日本においても経済状況の変化やアジア志向の高まりを背景に、学費や滞在費が英

1 本稿では、2013年度に本誌で発表した中間報告の執筆(2014年1月)後から2014年3月までに行った調査も2014年度分として扱った。

米留学に比べて格段に安いフィリピンへの英語留学者が急増している。一方フィリピン政府も英語が公用語であるというフィリピン社会の特性を活かし、留学生向け語学研修を雇用創出や観光振興へとつなげる政策に力を入れ始めている²。両国のニーズがマッチしたこの新しい教育分野は、フィリピン人講師から英語を学ぶという共通語としての英語 (English as a Lingua Franca: ELF) による英語教育という環境を生み出した。しかし、そうした環境での英語使用の特徴や様々な英語変種に対する意識・理解に及ぼす影響は未だ十分に明らかにされていない。フィリピンの ELF 環境における英語教育は、国際社会の場で英語を共通語として捉え使用するという意識変容へと繋がる可能性を秘めており、その効果についての学術的研究が期待されている。

2. 調査の方法

本研究の調査では、2 年という研究期間を生かし、「継続的インタビュー (留学前、留学中、留学後)」を行うことで、ダイナミックな言語態度変容の過程を捉えることを目指した。また、「参与観察」によって、実際にその「場」を共有している者の経験そのものを対象とすることを試みた。具体的には、英米指向の英語教育を受けてきた調査者自らがフィリピン英語留学に参与し、追想記録やフィールドノートにより言語態度の自己分析を行うと共に、非母語話者間で展開される授業談話の分析を学習者の視点から行い、共通語として使用される英語の特徴についての解明を試みた。

3. 調査結果

1) 調査の概要

2013 年度の調査の詳細は昨年度の報告に譲るが、概略を記せば次の通りであった。フォーマルインタビュー (留学前インタビュー 4 回 (8 人)、留学中インタビュー 2 回 (4 人)、留学後インタビュー 1 回 (2 人))、現地調査 (2 回、のべ 10 校の英語学校を訪問し、担当者に学校の概要、学生生活全般などの聞き取りを行った)、フィリピン留学フェア (東京 2013 年 5 月) での資料収集³、インフォーマルインタビューや観察 (訪問先学校、留学生の学校外訪問先など)、マニラで行われた学会 (Asia TEFL 2013 年 10 月) などへの参加を通して現地の研究者や専門家との意見交換なども行った。

2014 年度は、フォーマルインタビュー (留学前インタビュー 5 回 (9 人)、留学中インタビュー 10 回 (9 人)、留学後インタビュー 4 回 (9 人))、現地調査 (のべ 3 週間の参与観察を行い学生生活全般などの聞き取り及び観察を行うと同時に、教師への聞き取りなどを行っ

2 渡辺幸倫、羽井佐昭彦 (2014) 「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継続的インタビューを手掛かりに」『相模女子大学文化研究』(32), pp.47-66.

3 フィリピン留学フェア (東京) はフィリピン政府観光省、フィリピン留学普及協会の共催により 2013 年 5 月 17, 18 日の日程で新宿区内にて行われた。フィリピン国内の 37 の英語学校の他、留学エージェント 8 社などの参加もあった。

た)、フィリピン留学フェア（東京 2014 年 5 月）での資料収集⁴、学会（Asia Pacific Tourism Association, Asia TEFL, International Association for World Englishes）などへの研究発表を通して同分野の専門家との意見交換などを行った（各学会での発表の詳細は資料を参照のこと）。

2) インタビューについて

本年度は、昨年度の経験を念頭に、対象を本学の留学希望者 9 名に絞ってインタビューを行った。インタビューの時期などについては表 1 に示した通りだが、留学前、留学中、留学後の 3 段階でのインタビューをすべて行うことができた。

それぞれの段階での質問事項は次の通りであった。2014 年 2 月～3 月のフィリピン留学参加者 3 名に対しては、留学前に①留学先としてなぜフィリピンを選んだか、②フィリピン英語留学に対する印象、③フィリピンの英語に対する印象、④英語学校を選んだ基準、⑤フィリピン英語留学に何を期待するかを中心に質問し、留学中、留学後には、留学前の 5 項目についての考えと現実の留学経験との比較、留学に対する満足度、留学による自身の変化、留学中にあった重大な事件、留学後の生活の変化などについて質問した。

2014 年 8 月のフィリピン留学参加者については、授業談話の分析を視野に入れて、授業の録音も試みたため、留学中にインタビューを二度行い、質問を以下のように拡充した。留学中の 1 回目の質問事項は、①約 2 週間経過後の満足度、②フィリピン人講師の英語、③韓国人留学生の英語、④マンツーマン授業、⑤ターゲットモデルとしての英語、⑥流暢さ・正確さの優先度、などである。留学中の 2 回目の質問事項は、授業についてより踏み込んだ質問をした。質問内容は、①授業内でのリスニング・スピーキング、②どんな英語を話したいか（英語のモデル）、③フィリピン人講師の英語と本学の英語母語話者講師の英語の違い、④共通語として韓国人と英語を使うことによる変化、⑤日本に帰ってからの英語学習への影響の予想、などである。さらに帰国後のインタビューでは、日本での授業との比較を試み、①帰国後約 2 ヶ月経った後でのフィリピン英語留学の満足度、②帰国後の自分の英語力評価の変化、③帰国後の英語学習方法の変化、④フィリピン人講師の英語・教え方の振り返り、⑤英語に対する考え方の変化、⑥韓国人との交流の影響、などの質問項目を組み込んだ。

なお、インタビュー内容は文字化して調査者間で共有し、共同で分析を行った。表 1 に関してはインタビュー日付が同じ場合はグループインタビューであったことを示している。表 2 では、個別インタビューや異なるグループインタビューが同日に行われたこともあり、個別の場合とグループの場合を分けて明記し、グループインタビューでは同一グループで行われた対象者を明記した。

4 2014 年度は、東京ビッグサイトで 5 月 23 日から 25 日の日程で行われた。昨年を大きく上回る 50 の英語学校の参加があった。

表 1 インタビュー対象者 (2013 年度)

	名前	性別・年齢	留学先	留学前	留学中	留学後	備考
1	A	24 歳・男性	セブ	7 月 10 日	-	12 月 11 日	理工系大学院生。2 ヶ月。入社条件の英語テスト合格を目標。
2	B	22 歳・男性	セブ	7 月 10 日	10 月 25 日	3 月 20 日 2014 年	大学生。4 ヶ月。
3	C	40 歳・男性	バコロド	7 月 10 日	9 月 11 日	12 月 11 日	元 IT エンジニア。転職活動中。2 ヶ月。
4	D	21 歳・女性	ターラック	7 月 23 日	-	-	大学生。大学旅行サークル所属。2 か月。
5	E	21 歳・男性	セブ	7 月 23 日	-	3 月 20 日 2014 年	大学生。3 週間。留学後に長期旅行の予定。
6	F	26 歳・女性	セブ	8 月 14 日	10 月 25 日	-	元看護師。2 ヶ月。留学後にオーストラリアへワーキングホリデーの予定。
7	G	25 歳・女性	セブ	8 月 14 日	10 月 25 日	-	元デザイナー。6 ヶ月。留学後にオーストラリアへワーキングホリデーの予定。
8	H	31 歳・男性	バギオ	8 月 2 日	-	6 月 6 日 2014 年	IT エンジニア。6 ヶ月。

表 2 インタビュー対象者 (2014 年度)

	名前	性別・年齢	留学先	留学前	留学中	留学後	備考
1	I	19 歳・女性	セブ	1 月 27 日 個別	2 月 26 日 個別	4 月 29 日 IL	大学 1 年生。2014 年 2 月。1 ヶ月。
2	J	19 歳・女性	セブ	1 月 30 日 個別	3 月 20 日 個別	5 月 13 日 個別	大学 2 年生。2014 年 2 月。1 か月。
3	L	21 歳・女性	セブ	1 月 27 日 個別	2 月 20 日 個別	4 月 29 日 IL	大学 3 年生。2014 年 2 月。2 週間。
4	M	19 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 MNO	8 月 15 日 個別 8 月 24 日 MNO	10 月 27 日 MNO	大学 1 年生。2014 年 8 月。1 ヶ月。
5	N	19 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 MNO	8 月 18 日 個別 8 月 24 日 MNO	10 月 27 日 MNO	大学 1 年生。2014 年 8 月。1 ヶ月。
6	O	18 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 MNO	8 月 18 日 個別 8 月 24 日 MNO	10 月 27 日 MNO	大学 1 年生。2014 年 8 月。1 ヶ月。
7	P	18 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 PQR	8 月 15 日 PR 8 月 21 日 PQR	10 月 31 日 PQR	大学 1 年生。2014 年 8 月。3 週間。
8	Q	21 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 PQR	8 月 14 日 個別 8 月 21 日 PQR	10 月 31 日 PQR	大学 3 年生。2014 年 8 月。3 週間。
9	R	21 歳・女性	バコロド	7 月 29 日 PQR	8 月 15 日 PR 8 月 21 日 PQR	10 月 31 日 PQR	大学 3 年生。2014 年 8 月。3 週間。

3) 参与観察について

本年度は日系の Bayside English Cebu および LSLC (La Salle Language Center) にて二人で合計 7 週間分の参与観察を行った。調査先の二校の協力の下、全期間で留学生と同様の施設に宿泊し授業を受けた。また、授業を受講する以外にも留学生や教師に対するフォーマル、インフォーマルのインタビューや観察を行った。

Bayside English Cebu 調査

2014 年 2 月 16 日から 3 月 1 日 (羽井佐)、2014 年 2 月 23 日から 3 月 12 日 (渡辺) : フィリピン英語留学の概況を留学生自身の視点から知るための参与観察を行った。同じく Bayside に留学中の日本人学生計 20 名以上にインフォーマルインタビューを、3 名にはフォーマルインタビューを行った。また、3 月 11 日にフィリピン国技術教育技能開発庁セブ地方事務所を訪問し聞き取りを行った。

2014 年 9 月 7 日から 9 月 14 日 (渡辺) : フィリピン人教師の言語態度を探るため言語学習歴や英語教師歴を中心にフォーマルインタビューを行った (5 人に対して合計 18 時間)。また同時に留学生の生活の観察やインフォーマルインタビューを行った。

LSLC (La Salle Language Center) 調査

LSLC (La Salle Language Center) 2014 年 8 月 12 日から 8 月 26 日 (羽井佐) : LSLC の英語プログラム及び活動の視察、及びフィリピンへの英語留学に参加した本学学生に対する授業談話の収集とインタビュー、フィリピン人担当講師に対するインタビュー (本学学生 6 名、フィリピン人講師 4 名) を実施した。

4) 研究成果の発表について

研究論文

昨年度の本誌における研究ノート、相模女子大学紀要の他に下記の論文を発表した。

- ① WATANABE, Yukinori and HAISA, Akihiko (2015) "English schools in the Philippines: A new educational tourism destination for the Japanese "Abstract Proceedings, Asia Pacific Tourism Association" pp.102-105.
フィリピン英語留学の持つ観光という側面に焦点を当て、英語学校の紹介パンフレットなどの言説分析、留学予定者へのインタビュー分析研究を行った。
- ② 羽井佐昭彦 (2015) 「フィリピンに英語留学する日本人の言語態度に関する一考察」『日本大学経済学部 研究紀要』、第 77 号
フィリピン英語留学の参加者が留学前・中・後でどのような言語態度を持っているか、言語態度の変容は起きるのか、その場合の心理的メカニズムはどのようなものか、について考察した。

学会発表

本年度は下記 3 カ所での発表を行った。各発表の内容は本稿の末尾に資料として添付した。

- ① 20th Asia Pacific Tourism Association (2014 年 7 月 1 - 4 日、ベトナム・ホーチミン)

フィリピン英語留学の持つ観光という側面に焦点を当てた研究を発表した（渡辺・羽井佐）。資料 1 を参照。

② 12th International Asia TEFL (2014 年 8 月 28 – 30 日、マレーシア・クチン)

日本人英語学習者の言語態度についてフィリピン留学前、中、後のインタビューを通して分析した内容を発表した（羽井佐）。資料 2 を参照。

③ The 20th Conference of the International Association for World Englishes (2014 年 12 月 18 – 20 日、インド・ニューデリー)

フィリピン英語留学参加者へのインタビューを通して、近年の学習者の言語態度の変化の可能性について論じた（羽井佐）。資料 3 を参照。

5) 研究結果について

本年度の調査は初年度に得られた結果を踏まえ、再度留学生へのインタビューを試みた。初年度の調査では、フィリピンへ留学するという過程全体が、母語話者の英語を前提にした言語使用やアクセントを意識した学習モデルから、伝達内容を重視した共通語としての英語観に基づいた新たな学習モデルへの変容のプロセスとなっている可能性を見ることができた。そこで、本年度はフィリピン英語留学を英語非母語話者間で行われる ELF 環境下での英語教育と位置づけ、その言語態度の変容過程を裏付けるため、質的研究を通してさらなる考察を試みた。

その結果、参加者たちの言語態度の大きな特徴として、1. 英語の特にスピーキング能力向上に対する強い動機付け、2. ネイティブスピーカーの英語をターゲットとして指向する態度、3. フィリピン人講師の英語に対する寛容性、4. フィリピン人講師の英語に対する好意的態度、という 4 点が浮かび上がってきた。

英語スピーキング能力向上に対する強い動機づけは初年度の研究でも見られたことである。英語留学を考える日本人は、どこに留学するにしてもスピーキング能力向上に対する強い期待感を持つことが過去の研究などからも予想されるが、特にフィリピン英語留学では長時間にわたるマンツーマン教育という特徴から、グループレッスンを主体とする欧米への留学生以上にスピーキング能力向上に対する期待値が高くなる様子が伺えた。

また初年度の研究では、英語母語話者の英語モデルから共通語としての英語モデルへの変容の可能性を示唆したが、2 年目の調査では、その変容過程がそれほど単純ではないことがわかった。英語非母語話者であるフィリピン人講師の英語に対する寛容性は初年度にも観察されたが、本年度のインタビューでも確認され、さらにその英語に対する好意的な態度も見出された。一方で、フィリピン留学を経ても英語母語話者をモデルとする態度が維持され続けているという事実も判明した。

英語母語話者の英語をモデルとしつつも、フィリピン人講師（英語非母語話者）の英語に

に対する寛容性や好意的態度という、一見矛盾するような傾向は、フィリピン留学の参加者たちがフィリピン人講師の英語を、英語母語話者の英語の対立軸として見るのではなく、英語母語話者の英語へ移行する中途段階として位置づけていると考えたと説明がつく。

しかし同時に、英語母語話者の英語と対比して、フィリピン人講師の英語の「わかり易さ」という点を高く評価しており、共通語として使われる英語の根幹の部分で共鳴していることがわかった。従って共通語としての英語モデルへの変容の可能性は否定できず、今後のさらなる調査研究の必要性を感じるところである。

以上のように日本人学習者の言語態度の変容を中心に据えた分析に一定の成果をみることができた一方で、昨年度に引き続き代表的な英語学校の状況把握や、日本国内でのフィリピン留学プロモーションやフィリピン英語留学を推進するフィリピン観光省をはじめとする関係各々が形成している言説も分析した。これはフィリピンの英語学校やフィリピンで英語を学ぼうとする日本人英語学習者の置かれている社会的な状況を理解する上で大変有用であった。

4. おわりに

本稿では、二年計画で行っている研究のうち、2年目の調査（日本からフィリピンへ留学する日本人学習者を対象にしたインタビュー、フィリピン人講師へのインタビュー、授業観察、参与観察など）の概要を取りまとめ、今後の論点を示した。

本研究を始めた当初は、フィリピン英語留学を通して「ネイティブスピーカーのように話せなくてもいい。共通語としてわかり易い英語を使うことが重要だと気づいた」といったような明示的な言語態度変容を予想していたが、現段階までの分析ではそのような明確な言語態度変容は確認されなかった。しかしながら、前述したように、フィリピン人講師の英語に対する寛容性や好意的態度が見られ、それは共通語としての英語（ELF）の重要性に対する暗示的な態度変容を示すものとして解釈でき、本研究の大きな成果であったと考える。今回の研究では、留学生たちは留学前に「共通語としての英語（ELF）」という概念を特に与えられずに留学に参加したが、フィリピンでの英語の授業がELF環境であることを留学前に意識化させることで、どのような言語態度の変容が見られるかは今後の課題としたい。

さらに今年度は、フィリピン人講師と日本人学習者のマンツーマン授業でのインタラクションを録音したが、その分析は現在進行中であり、今後発表していく予定である。特にこの分析は、本研究の参加者が指摘していた「フィリピン人講師の英語のわかり易さ」という点を、スピードや発音、さらには単語や構文の調整といった観点から解明するうえで極めて重要な資料となるので十分に時間をかけて取り組みたい。さらには調査者自身が行った参与観察の分析、またフィリピン人講師がどのような意識で英語を使い、どのように日本人の英語変種に対応しながら英語を教えているのかについてのインタビュー分析も次の探求課題としたい。

文部科学省は、平成21年3月告示の高等学校学習指導要領で、授業は英語で行うことを

基本とすると明記し、今後中学校においても英語で授業が行われることが検討されている。この方針には賛否両論あるが、日本人英語教師が今後英語で授業することが求められることが避けられないだろう。日本の教室で英語を使って授業するという状況は、日本語が共通の母語である場合がほとんどとは言え、英語非母語話者間で英語を使用する ELF 環境と捉えることもできる。そのような観点からも、本研究で扱っているフィリピン英語留学という ELF 環境での英語教育の考察、特にそこで行われている授業の分析、その授業体験による言語態度の変容は、日本の英語教育改善に向けての大きな示唆を与えてくれるものとなるだろう。

付記：本研究は、相模女子大学特定研究助成費（B）（『フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継続的インタビュー及び参与観察を手掛かりに』）の助成を受けたものである。

資料

1. Asia Pacific Tourism Association での発表の概要

20th Asia Pacific Tourism Association（2014 年 7 月 1－4 日、ベトナム・ホーチミン）

ENGLISH SCHOOLS IN THE PHILIPPINES: A NEW EDUCATIONAL TOURISM DESTINATION FOR THE JAPANESE

WATANABE, Yukinori and HAISA, Akihiko
(Sagami Women's University)

The Philippines' distinctive natural environment, unique culture, and friendly people have long made it a favored destination for Japanese tourists. More recently, the Philippines' socio-linguistic character has also become an attraction. With the rising recognition of World Englishes (Kachru, 1985), more learners?particularly Japanese and South Korean students?see the Philippines as an attractive place to learn English. Watanabe and Haisa (2014) estimate that in 2013 over 110,000 students paid schools 3.6 billion US dollars to study English in the Philippines. This increase in the number of Japanese studying in the Philippines is significant, especially since the decline in the total number of Japanese studying overseas. While most research on Japanese study abroad programs focuses on their educational aspects, it is the Department of Tourism rather than the Department of Education that promotes study abroad programs in the Philippines. This suggests that the Filipino government views English as a commodity and Japanese learners as consumers.

Thus, these programs have two critical aspects: first, as part of the English language learning (ELL) industry; and second, as part of the educational tourism industry. This paper analyzes relevant news articles (Macro level), promotional materials (Meso level), and interviews with potential students (Micro level) to develop a more thorough understanding of the intersection between English language learning and the marketplace. These analyses revealed that Study English abroad programs in the Philippines have a positive image among study participants. The representation of the Philippines in the media and active promotion of schools played important roles in constructing this image. For our study participants, the advantages of the Philippines outweighed those of traditional destinations, such as the US or UK. Hence, within a short period, the Philippines has successfully convinced potential students of its suitability as an education destination. Overall, this is a successful business model, in which the economic gap between two nations is utilized ethically, not exploited by enterprises. This is partly effectuated through the concept of education, where students respect their teachers, thereby boosting teachers' self-esteem. One-on-one instruction is a key feature of not only meeting each student's demand in practicing spoken English but also strengthening the teacher-student bond. Issues persist such as students' seasonality, teacher mobility, and the necessity of a thorough framework regarding the quality assurance of education, including teacher training. By contrast, establishing Filipino-funded schools, especially those that are university affiliated, is an opportunity. The model is well established, and university students from Japan and Korea want to gain cultural exchange experience from Filipino students, and earn university credits from their home institution through these educational tours.

2. Asia TEFL での発表の概要

12th International Asia TEFL (2014 年 8 月 28 – 30 日、マレーシア・クチン)

Language Attitudes of Japanese Learners of English: Before, During, and After Studying in the Philippines

HAISA, Akihiko and WATANABE, Yukinori
(Sagami Women's University)

Studying English in the Philippines has attracted many Japanese learners because of the affordability of the English programs and the appeal of one-on-one instruction. However,

another unique feature has not been fully explored: teacher-student interaction between nonnative speakers in classes where English is used as a lingua franca (Jenkins, 2007). Therefore, it is worth investigating how these experiences influence Japanese learners' attitudes toward English, as Japanese learners tend to prefer native speaker varieties as their target models (Matsuda, 2003). Data were collected from participants of English programs in the Philippines at three stages?before, during, and after their study?through written questionnaires and group and individual interviews. A qualitative analysis of the data before their study revealed four characteristics: 1) strong determination to study English, 2) high expectations for developing spoken English skill, 3) perception of English as a practical tool, and 4) almost no concern about Filipino accents. Interviews during and after their study confirmed these four characteristics and added another: Participants highly appreciated the intelligibility of English spoken by Filipino teachers. These findings differ from those of previous studies about Japanese learners' language attitudes about varieties of English. This study thus indicates the possibility that the process of participating English programs in the Philippines changes Japanese learners' language attitude from a "native-accent oriented model" to an "intelligibility oriented model." Details will be discussed further in the presentation by illustrating actual quotations from interview participants.

3. International Association for World Englishes での発表の概要

The 20th Conference of the International Association for World Englishes (2014 年 12 月 18 - 20 日、インド・ニューデリー)

Changing Attitudes Toward the Study of English: A Qualitative Analysis of Japanese Learners in the Philippines

HAISA, Akihiko and WATANABE, Yukinori
(Sagami Women's University)

There has been a drastic increase in the number of Japanese learners of English in the Philippines, from about 4,000 in 2010 to 26,000 in 2013 (Philippine Department of Tourism, 2014). Previously, it was assumed that Japanese students preferred to be taught English by native speakers (NSs) rather than by non-native speakers (NNSs) (Hanamoto, 2010). Therefore, the choice of the Philippines as a study destination is inconsistent with this assumption. It is believed that students are making this choice mainly because of the

affordability of the Philippines and the appeal of one-on-one instruction. However, other factors related to learners' ideology of the English language, such as their attitudes toward being taught English by NNS Filipino teachers, have not been fully explored. Therefore, it is worth investigating how these factors influence Japanese learners' attitudes toward Englishes and English learning. Data were collected from eleven participants studying English in the Philippines at three stages - before, during, and after their study - through written questionnaires and group and individual interviews. A qualitative analysis of the interviews revealed signs of a changing attitude toward Englishes and English learning. The students had no reservations about learning English from Filipino teachers in the Philippines, although American and British English remained the predominant models for them. Moreover, most participants did not appear to have any particular interest in the differences between NS Englishes and NNS Englishes. Overall, our analysis suggests that there is a growing population of Japanese English learners who place higher emphasis on the intelligibility and usability of English rather than on the acquisition of a native-like accent and proficiency.